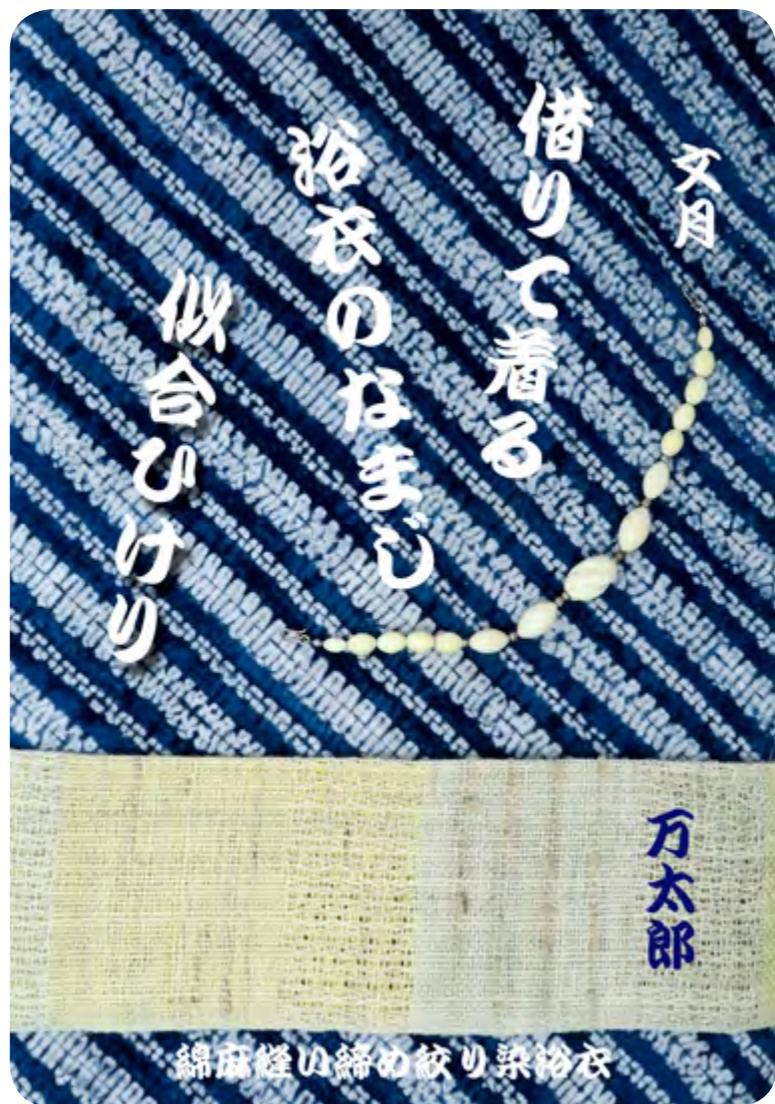


あそ

8

2018





五月

借りて着る

返衣のなまこ

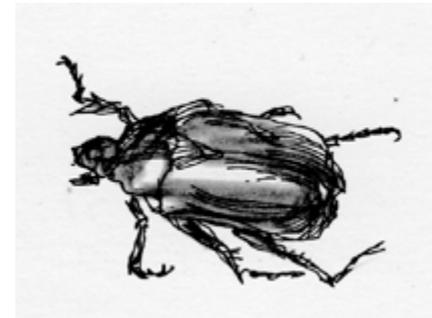
似合ひけり

万太郎

綿麻縫の締め紋り染物衣

あそ

八月



東京 佐藤 喜孝

ソーダ水

お隣の星にあいさつもうして居
豆ご飯作って食べて片づけて
赤ちゃんが足りないといふソーダ水
ゆく水のはたてのごとき椎若葉
白雨や東海道の一里塚

東京 篠田 純子

六月

俯いて濡るる子鴉丸の内
藻の花や皇居の濠に瀬の現るる
地ぼてりの坂下門や笙の風
梅雨の朝窓辺に小さき濡れ雀
十秒息止め潜るCT胸涼し

石川 定梶じょう

物干し

諦めるやうなり烏賊火払暁は
傾いて水平線や大南風
梅雨つづく香奠いくら包むべく
女郎蜘蛛踏まふる震度三か四か
物干し場早や物掛かり暑の予感

埼玉 須賀 敏子

額の花

挿し芽して五十年余の額の花
来し道を望む薄暮の登山小屋
雪の峰旧軽井沢に芭蕉の碑
父の日や大きなテレビ届きけり
涸れ梅雨や猫の「きなこ」は打ち解けず

東京 田中 藤穂

父の日

薄墨の一書を掲げ夏座敷
ソーダ水誰の言ふこと本当か
薄幸の幼女のノート梅雨しとど
父の日やあたたかなりし父の膝
表札の古りし門柱櫛の花

三重 長崎 桂子

十薬

曇りゐて草木の湿り蚋群るる
樹の回り蚊の飛交ひし不気味かな
梅雨に入る気象のニュース抛り所
真白に微笑むや十薬の花
十薬は物陰なれど真盛り

梅雨

東京

森 なほ子

巫女の鈴チリリと払ふ梅雨湿
漆喰の壁の鰻跡梅雨に入る
大学をぶらぶら歩きソーダ水
梅雨空にビルの先端融け込める
サイレンの路地に溢るる梅雨晴間

東京

赤座 典子

夏満月

綿飴のやがて真綿に夏の雲
道祖神の道案内や草清水
十室の宿に大甕黒目高
白南風や勢ひ戻る新聞紙
風尽きて夏満月の鋭き光

埼玉

秋川 泉

夢の中

梅雨近し空っぽにする冷蔵庫
草むしりテレビの中は嘘ばかり
一の市一番重い西瓜買ふ
夢の中手の届かないソーダ水
夕暮れやそこだけ目立つ毒空木

東京

石森 理和

桜の実

古里の夏蜜柑着く見端悪し
桃の香の育てし薔薇を一輪挿
梅雨に入る歩道に傾斜あるを知る
桜の実並木の一本鈴生りに
小粒なり柿薔薇柚も緑の実

埼玉

大日向幸江

秋の虫

鈴虫の食べる煮干を品定め
秋風の通る廊下に職人の
二人して流れ作業で梅を干す
出来たての虹を見せたく電話口
秋茄子の始末こだはる農家かな

東京

七郎衛門吉保

湯沢にて

万緑に宇宙遊泳ペアリフト
草抜いてついと出す手に山羊の食み
手花火や子等のS L煙の中
五頭山麓ラドン湯巡り夕端居
風呂ラジオ壊れて急に梅雨の音

六月号作品より

秋川泉・森なほ子

破顔のみその他抹消花の雲

佐藤 喜孝

奥様の恭子さんを詠まれた句。にこやかに笑って
いらっしやるお顔だけが偲ばれて、その他の事は花
の雲の中に全て消えてしまい、やがて恭子さんは晴
れやかな笑顔で花の雲のまん中に佇んでいらっしや
る。恭子さんと作者はゆっくりと話をされたことで
しよう。(泉)

猫の子はいらんかね満天星つつじ

大日向幸江

意表をつく面白い句ですね。好きなのでこの句に
決めたものの、句評難しいです。句評の難しい句は
色々ありますが、(阿部完市など)そういう句はた
だ感じや雰囲気味わうことにしています。この句
もそのとぼけた味を味わうことにさせて頂きます。
すみません。(なほ子)

遅しき新芽七本君子蘭

石森 理和

遅しきという言葉がぴったりの君子蘭の新芽で
す。それが七本とは壮観ですね。花の時期にはさぞ
見事なことでしょう。ちなみに我が家の君子蘭は4
株でしたが、この冬の寒さで枯れてしまい、新芽は
一本しかでませんでした。一昨年の大雪にも耐えた
のに……。 (なほ子)

花は葉に料金無料と滝桜

七郎衛門吉保

作者が三春を訪れたとき、すでに葉桜となってい
たのです、残念ながら。それでもめげず、しぶとく
一句に……。滝桜が申し訳なさそうに、料金はい
らないよと言っているように作者には見えました。
なんとも人間臭い滝桜ですね。この作者ならではの
一句だと思います。(なほ子)

朝採りの胡瓜に夜の温度あり

篠田 純子

早起きをされた作者。丹精込めて作られた夏野菜の胡瓜を採る。それはまだ夜気を含んでひんやりとずっしりと。手の中にその存在感が伝わり、その感動を詠まれた。瑞々しい美味しい胡瓜です。(泉)

ねころんで雲の行くかたうまごやし 定梶じょう

何とも気持ちのよい句です。しろつめ草の花(うまごやし)は、かすかに甘さをたたえた緑いっぱい香がします。一面のしろつめ草の花が咲いている野原に寝ころんで雲をながめている作者。いつまでもいつまでも飽きる事なく流れる雲に想像の翼を乗せていつまでも。(泉)

桜草咲いてあなたの誕生日

須賀 敏子

たしか姪御さんか何かのお子さんとお聞きしたよ

事でしょう。ずっと気持ちよく鶯は囀り続け「もういいのにねー」と云うお顔の作者。とても楽しい情景に思わず笑みが零れます。(泉)

花過ぎて花の道踏みしめてく

長崎 桂子

今年の桜も散り、美しい花のトンネルだった道も、今は花びらを靴の下に踏ん行くのです。無常観が漂っているようです。(なほ子)

春愁やかもめの脚のはがね色

森 なほ子

調べてみました。オオセグロカモメ・セグロカモメ・ワシカモメ・シロカモメ。これらのかもめは足の色はピンク。ウミネコ・カモメの足は黄色。ユリカモメは赤。するとかもめの足の黄色が、はがね色に見えたと云う事でしょうか。そして季語の「春愁」が黄色の足がはがね色に見えたと云うのは本当に季語とピッタリ合うと感じ入りました。(泉)

うに思いますが、違っていたらすみません。きっと作者の身近におられ、幼いころから成長を見守ってこられたのでしょう。私も近くに住んでいる姪がおりました。その一年生になる子を赤ちゃんの頃から見てきました。すっきりした形の美しい句、素敵な誕生日のプレゼントですね！桜草の似合う十四歳、お名前のように咲いてください。(なほ子)

青葉冷え足にまつはり魚板打つ

竹内 弘子

どちらにお出かけになったのでしょうか。青葉の季節でも冷えが足にも重く、静まり返った境内から中を窺う様に魚板を思い切り打つ。さて中からは何方がお出座しになったのでしょうか。(泉)

高らかに鳴き庭去らず鶯は

田中 藤穂

作者の御庭に日々飛来する鳥たち。鶯はしばし鳴いてその声に聴き惚れる。ところが今日はどうした

放射線量表示かげろふ常磐道

赤座 典子

常磐道をドライブ中、どんな形かわかりませんが、放射線量を表示しているモノを見かけ、ハツとした作者。それは七年後の今も、目には見えないがかげろふのようにそんざいしている。こんな題材もさりげなく俳句にしてしまう柔軟な作者です。今の数値はどれくらいなんですか？(なほ子)

花吹雪長屋門入る五十人

秋川 泉

五十人の客が土地の旧家に招かれたお花見と伺いました。くぐるは立派な長屋門。もう花も終わりに近いのでしょうか、花吹雪を浴びて、着飾った人々が三々五々これから始まる宴にわくわくししながら……。豪勢なお花見になったことでしょうか。

(なほ子)

人間の夢を見てゐる鳥の子 佐藤喜孝

芽だけ摘み濃き草餅や祖母の手の 七郎衛門吉保

昼顔の朝から咲いて検査の日 篠田純子

子供の日とつてもとつてもティッシュ出てく 定梶じょう

青嵐宅配便は小走りに 須賀敏子

子供の日過ぎて母の日鴉鳴く 田中藤穂



此の辺り田畑は続くつばくらめ 長崎桂子

巫女舞の頬ふつくらと青葉風 森なほ子

来れる日の少なしと孫五月尽 赤座典子

薫風や転びはじける中学生 秋川 泉

紫陽花や道掃く方に会釈して 石森理和

高慢なバラを諫めよ雨よ降れ 大日向幸江



喜孝抄



佐藤喜孝

梶子や米朝首脳初会談
葉桜や大川の流れもみどり観光船
清々し青田に風の波紋かな

井上 石動

末つ子のお調子者よアロハシャツ
俵屋の行き来の古都や百日紅
未草眠たく咲いて真昼なる

一句目、新聞の見出し語に季語が乗ったやうな作り。梶子に作者の意が込められてゐるはず。梶子・口無しと考へたが作者の意に辿り着けなかつた。おゆるしを。二句目、余りに字余り。「大川の流れもみどり花は葉に」ぐらいでは。

大日向幸江

夏風邪と電話で語る顛末を

風台風ポプラの老樹食ひしるる
秋風に全指さはさは手話の女

書くまでもないが、未草は未の刻、午后二時ごろ開花するといふことでこの名がある。夕方にはもう閉ぢるといふ花なのに「眠たく咲いて」といふ。未草は睡蓮ともいふ。

「松のことは松にならへ」といふ芭蕉の言葉が浮かんできた。

石森 理和

女性の細い指が「さはさは」とたのしげに動くのが見える、爽やかな俳句。「さはさは」は気分では分かるの

曲屋に三百年の一位かな
山形方言隔靴搔痒夏館

だが辞書のお世話にならなくなったが、このやうな擬態語は詠み手も読み手も感覚で処理するしかない気がついていた。十指が魅力的に動くさまが秋風と共に気持ちがいい。

七郎衛門吉保

親しき友、弘子さん
梶子の一輪咲いて友訃報
艶やかを好みし友にプラムジャム
他界でもプラムの色の紅を点し

旧尾形家住宅をしらべた。山形県上市市にあり、十七世紀に建てられた庄屋さんの家ださうだ。まず、よく遺されてきたものだと感じ入る。前二句、建物に圧倒されてしまったやうだ。季語はやはりあった方が潤ひがある。たとへば「栗の木の手斧の跡の涼しかり」「すずしかり大黒柱の手斧跡」「三句目でやっと作者の息づかいが聞こえた。因みに千葉県にも同名の遺された建物があった。こちらも江戸時代の豪農の家。

田中 藤穂

玻璃戸まできては遠のく梅雨の蝶
夏満月より滴りし星一つ

このやうなおもひの濃い前書のある、メッセージ性の強い作品は、読み手がとやかくいふ隙間がないのです。で、てにをはのことを少し。「咲いて」は「咲けり」。「友訃報」は「友の訃報」位がよいか。または少し直截なので「訃のしらせ」。

赤座 典子

旧尾形家住宅
栗材の大黒柱の手斧跡

月のあかりに負けずに寄り添ってゐる星がときをりある。作者の見たのは金星か木星かは知らぬが、星の名前が分からなくとも孤独に見える月に添ふやうにある明るい星は気になる。「滴りし」の抒情に感心した。昔の人も月の傍の星に関心を示した。

さびた咲き鉄道官舎山羊を飼ふ

回想の句であらふ。わたしの心のどこかにしまはれてゐたものが、見つかったやうなつかしい気持ちになった。

篠田 純子

行幸通り直ぐなに進む山王祭

馬冷やす坂下門や日枝祭

現、見た光景なのに、表現によりタイムスリップをしてしまった。坂下門・日枝祭もあるべき語彙を並べただけ。なのになんかには魅力のある作品に仕上がってゐる。祭の一点景「馬冷やす」が、今と昔を繋いでゐる。

須賀 敏子

ゆつくりと那須のゴンドラ山法師

青葉闇二歳・当歳古き墓誌

今テレビで「グッド・ドクター」と題し自閉症で小児科医のドラマが放映されてゐる。「全ての子供を大人にしたい」という願ひをも持った若い医師である。掲句は何も述べてゐないが十二分に作者の想ひが伝はった。

亡き友の誕生日なり草を引く

この句も殊更思ひを述べてはゐないのに作者の友へのおもひが静かに伝はってくる。「草を引く」がおもひを全て代弁してくれてゐる。

長崎 桂子

孝行や清清し養老の滝

新緑に新築二軒嬉嬉として

萬緑や飛行機雲はゆるぎなし

生命力盛んな萬緑。その上を飛行機雲が真一文字に引

よこ這ひの己れを是とし蟹急ぐ

自画像か。

散髪の椅子に囚はれ遠く雷

床屋の椅子はなぜあんな豪華なかたちをしてゐるのかあらためて不思議に思った。パーパーチェアといふらしい。回転したり寝かせたりとレバー一つで理髪師の好きな位置に調整する頭を動かす。コックピットを思はせる大層な椅子のかたちである。それはともかく囚はれた気分になつて髭など当たつてもらつてゐると遠雷に気がついた。そこで筆は止まりそれ以上は書かれてゐないが、「囚はれ」の心持ちに遠雷が関はつて読ませる句である。

源流の滝や低きを尊めり

「滝」の字は水が竜のやうに墜ちる様からと聞く。掲句の滝は子供の竜のやうな姿をした滝かも知れない。「低きを尊めり」にその土地の人の畏敬の念が伝はつてきた。「よこ這ひ」「囚はれ」「低きを」と形而下的語彙もじょうマジックで形而上的語彙に代はつてしまふ。

かれていく。明快で力強い光景。「ゆるぎなし」で正にゆるぎない句に仕上げられてゐる。

秋川 泉

枇杷を喰ふ小鳥の朝のにぎにぎし

小雨降る枇杷いっぱいの籠の中

屋根の上雨来る前に枇杷と採る

屋根に登つて枇杷を採る。木に梯子をかけて採る人もゐるのだらう。屋根の上は気を付ければ梯子より足元が安定してゐる。雨に降られると採り入れがやっかいなやうだ。それにしても大きな枇杷の木にびつしりと枇杷が実つてゐる様が見えてきた。

因みにとても美味しい枇杷である。

(順不同)

葉

柳の芽葉先はぴんと反り上る
てんと虫愛の鉾かも葉にすがり
刃
郷の袖刃をいれざりし幾日かも
刃を研いで水を濁せる夕月夜
刃物研ぐ職人氣質天高し
幾度刃を入れ晩年の冬の月
築地時雨刃物屋の奥刃物研ぐ
刃毀れや飯盛山の赤まんま
チーズに刃入れ初秋とおもひけり
刃を入れて林檎の蜜を確かめる
これほどに鉦の刃毀れ竹の秋
刃を当てる水餅硬し朝厨
冬晴の鉄の刃先開幕式

齒

みどりごの齒ののぞく笑み福寿草
夏負けの始まりのまづ齒が痛む
祖父は祖父兒は兒の齒型西瓜食む
櫛の齒の欠けるが如く陽炎の
齒が生える栗鼠の仕草に林檎食む
糸切齒駆けぬけてゆく秋の風
烏賊を干す島の女は齒で笑ふ

石森 理和
渡邊 友七
渡邊 友七
田中 藤穂
芝宮須磨子
堀内 一郎
田中 藤穂
佐藤 恭子
田中 藤穂
須賀 敏子
中川句 寿夫
秋川 泉
赤座 典子
赤座 典子
赤座 典子
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂
河合 笑子
石森 理和
佐藤 恭子
後藤 志づ

齒がための玩具かじる児冬木の芽
われとわが齒ざはりを聴く芋茎食む
齒のたたぬ瓦せんべい山椒の芽
せんべいに齒を食ひしる秋の暮
千秋と名あるリングに齒をあてる
椎の花齒の見える黒い犬
透きつ齒の越後訛や溝洿
齒の並ぶレントゲン写真秋彼岸
立冬や齒ごたえのある手打蕎麦
冬の草抜いて齒に浸むいたみあり
明日嫁ぐキュッと奥齒を二日灸
チューリップ象の花子に齒のひとつ
齒を抜きし医院の窓の柿若葉
不機嫌な梅雨ふきげんな齒の痛く
金秋や飯齒はなれぬチューインガム
すあま齒に粘し物の芽とのはず
齒心への胡瓜ぼりぼり投票日
起きてゐて齒ざしりをする余寒かな
齒が痛みみ杏の花のまつ盛り
冬ざるる前齒の抜けた夢を見し
極月や齒医者に耳も診てもらふ
二百十日齒医者椅子は三番目
瓜漬けの齒心え確か茶漬かな

東 亜 未
竹内 弘子
石森 理和
堀内 一郎
森山のりこ
佐藤 喜孝
佐藤 恭子
赤座 典子
田中 藤穂
鈴木多枝子
藤野 寿子
篠田 純子
早崎 泰江
芝 尚子
佐藤 恭子
竹内 弘子
石森 理和
篠田 純子
田中 藤穂
大日向幸江
篠田 純子
須賀 敏子
黒澤 佳子

歳末や齒医者で貰ふ福引券
櫛の木につきし齒形の春焦がる
抜くと決め齒医者へ向かふ花の雨

ハート

レインボーブリッジにひしやげた花火ハート型

バレンタイン海の男にハートチョコ

ハーブ

ばらの花ハーブ一滴紅茶に入れ
夏負けてスープに利かすハーブかな
三日はや終日寡黙にハーブティー

ハーブ

ホスピタルハーブ流れて夏来る
走根にちいさなハーブ蜘蛛の絲
ハーブで弾く「きらきら星」や糸のこ草

ハモニカ

老人はハモニカを吹き年終る
ハモニカ五月の穴を埋めてもや
建国日卒寿の母のハモニカ
ゴールデンウィーク故郷とはハモニカ
涙ためふくハモニカ冷し酒
ハモニカに合唱湧くや初紅葉

黒澤 佳子
大日向幸江
須賀 敏子
篠田 純子
藤野 寿子
鈴木多枝子
森山のりこ
芝宮須磨子
山莊 慶子
佐藤 喜孝
篠田 純子
堀内 一郎
堀内 一郎
赤座 典子
堀内 一郎
篠田 純子
篠田 純子

秋もはや八十五才ハモニカ
ハモニカ真つ黒黒に吊し柿
ハモニカは欲求不満冬の果
飛行船きみどりみどりハモニカ
ハモニカや時に春風暴走す
ハモニカの音色は今も春の雲
鳥雲にハモニカの音遠くより
朧夜にハモニカ聞ゆ童歌
ハモニカに沢山の穴花粉症
ハモニカのたどたどしく過ぐ秋の昼

灰

手あぶりの灰を篩ひて誰が吸殻
実柘榴に浅間の灰のうつすらと
十一月灰を篩ひて媪となる
炉塞の指美しく灰ならす
蒔灰の程よき湿り炉を開く
師不在の会終ふ寒き灰皿重ね
木灰撒き月日をほぐす手毬花
細胞内の死の灰死なず夏の空
薯植える藁灰顔にもろに受く
篝火の灰払ひつつ札収
梅雨ふかし灰のにほひに母のにほひ

堀内 一郎
石森 理和
堀内 一郎
石森 理和
石森 理和
石森 理和
田中 藤穂
長崎 桂子
長崎 喜孝
長崎 喜孝
河合 笑子
赤座 典子
東 亜 未
芝宮須磨子
森山のりこ
渡邊 友七
長崎 桂子
篠田 純子
鈴木多枝子
赤座 典子
竹内 弘子

あとがき

五月号の表紙写真はなんの花だか分かりましたか。近くの原っぱのような公園に咲いておりました。調べてはじめてピラカンサの花だと知りました。秋から冬には見慣れた木なのに驚きました。今この公園は大工事中。あの木はだうなるのでしょうか。

六月号は睡蓮・未草です。よく行く杉並区の三寶寺池の未草です。茶店で一杯やってバスに揺られて帰るのが楽しみ。花の中に灯が点ってゐるやうで好きな写真。

七月号は青梅街道と環七通りの交差する辺りにある「蚕糸の森公園」です。蚕糸試験場跡を国から譲り受け公園になってゐます。背丈より高い桑畑もあります。ギターの調べは水の音で聞こえませんでした。

八月号は浦和の調の宮神社の境内です。数年前まで月一回この前を通りました。わたしの写真は

記憶の補助です。(喜孝)



二〇一八年八月号

発行日 八月十九日

発行所 東京都中野区中央2, 50, 3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

竹僊房

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)